2006 年 10 月 26 日（木）　第 38 回研究会

「チベット人活仏がモンゴル国王として即位するための条件
――19 世紀すえのモンゴル語文書史料の分析――」

二木博史 氏（本学教授）

本研究会においては、ムルレグツェグ事件（1890, 91 年）に関わる文書史料の分析をとおして、チベット人活仏ジェプツンダンバ・ホトクト 8 世が、そのカリスマ性をたかめ、のちに（1911 年）国王として即位するための条件を獲得したプロセスについて、報告された。

まず、問題の所在として、弱体化した清帝国は、義和団事件後に「新政」を実施するが、モンゴル地域に対する新政策は、間接統治から直接統治への移行のかたちをとったため、モンゴル人は清からの離脱、独立を志向しはじめること、しかし、独立のための準備はすでに、1890 年代にはじまっていたとみることが可能で、ジェプツンダンバ・ホトグトのイニシャティブは、特に注目されること、が説明された。具体的には、a.チベット出身のジェプツンダンバ・ホトクト 8 世アグワーン＝ロブサン＝チョイジ＝ニャム＝ダンザン＝ワンチグ＝バルサンボー（ngag dbang blo bzang chos kyi nyi ma bstan ’dzin dbang phyug dpal bzang po, 1869～1924）は、なぜモンゴル国王ボグド・ハーン（在位 1911～1924）として即位しえたか？単にその宗教的権威だけで説明が可能か？べつのどのような要素が作用したか？　b.「民主化」後のモンゴルにおける“歴史のみなおし”のなかでの、ジェプツンダンバ・ホトクトの再評価をどのように解釈するか？　c.これまで十分に利用されていない文書史料の分析から何がわかるか？　の 3 点が指摘された。

次に、先行研究の紹介がなされ、ジェプツンダンバ・ホトクト 1 世から 8 世までの流れ、及びムルレグツェグ事件について説明された。

ムルレグツェグ事件とは、1890 年 6 月にジェプツンダンバ・ホトグト 8 世の側近のわかい僧ソイボン（soyibon < Tib. gsol dpon）・ムルレグツェグが逮捕され、最初は東部辺境の、郡王ドルジパラム（1884 年に任命、のちにヘルレン・バルス・ホト盟の盟長）の領地（セツェン・ハン・アイマグ中右旗、現在のハルハ・ゴル郡）に流刑処分になり、その後さらにジャムスランジャブ公（在位、1876～1891）の支配地域（同アイマグ左翼前旗）にうつされ、ひそかに処刑（？）された（1891 年 6 月）事件である。このプロセスで、8 世と東部地方の実力者ドルジパラム王のあいだに対立が生じ、8 世は自己の行動の正当性をうったえた書簡を何度も全国の領主、将軍におくったことが説明された。そして、そこにはジェプツンダンバ・ホトグト 1 世、2 世の転生者である 8 世の“黄金氏族”への帰属意識がみられることが指摘された。

最後に、結論として以下が指摘された。①清朝の弱体化、ロシアの影響力の拡大という背景のなかで、ジェプツンダンバ 8 世は、聖俗の権威をあわせもつ存在として、自己をアピールし、汎モンゴル的国家としての新モンゴル王国の求心力になりうる権威としての「チンギスの血統」を再利用した。　②また、各地の領主にたいしておくったおおくの書簡を通じて、直接、自分のことばではたらきかけ、その権威をたかめた。　③これらの書簡は、公文書を伝達する公的ルートでおくられたが、これ以外に活仏の「教書」とされる、「末世思想」と関連のある、おおくは漢人を敵視する内容の文章が、かきうつされてひろがり、これらも活仏のカリスマ性をたかめるのに重要な役割をはたした。　④内モンゴル東部で同時期におこった漢人宗教結社「金丹道」による

モンゴル人攻撃（1891 年すえ）をもかんがえあわせると、このころから、モンゴル近代史はひとつの転換期にはいったとみることができる。

以上の報告後、ジェプツンダンバ・ホトクト 8 世の具体的な権力や「教書」に関する質問が出される等、多くの質疑応答が行われ、活発な議論が交わされた。